ドリス人の侵入をめぐる二、三の問題

新村祐一郎

序

ギリシアの歴史を考える場合に忘れてならないことはこの地がエーゲ海に面していることである。エーゲ海には俗称多島海が示すように極めて数多くの大小の島々があるので、その海の東側と西側とは比較的容易に連絡し得た。そのためギリシアの歴史はエーゲ海周辺の諸地域と無関係にはあり得ず、そのことを念頭に置きながら考察する必要がある。本稿はアテナイとはしばしば対照的であるといわれるスパルタの歴史の前史というべき時期を再検討することを目的としたものである。

スパルタの歴史を考えるに当たって最初に出会う問題はこのポリスを一体如何なる種族が建てたかということである。ギリシア人は多くの種族乃至は方言群に分かれている。スパルタは古来ドリス（Doris）人によって建設されたポリスとされている。だが実はこのドリス人という種族が極めて不明確なのである。ドリス人の南部ギリシアへの移動を一般に〈ドリス人の侵入〉（Dorian Invasion）と呼んでいるが、本拙論ではギリシアの古史を繙きつゝこの侵入に関連する問題を取り扱いたい。

一

ギリシアの古史を繙くと紀元前一〇〇〇〇年〔以下、年代は特記するもの以外はすべて紀元前（B. C.）であるが「前」または‘B. C.’の標記を略す〕から中石器時代になるが、六〇〇〇年頃から新石器時代に移ったことが知られる。中石器時代から新石器時代への転換は外来民族のあったことを意味しており、おそらく東方から既に陶器製作と農

耕とを知っていた民族が移動して来て定住したのであろう。新石器時代は約三〇〇〇年間続くが、その後また青銅器を持った民族が侵入し青鍋器時代へ移行する。新石器から青銅器への移行はエジプトと西南アジアでは三五〇〇年以前であるからエーゲ海周辺ではこれより少し遅れる。新しい冶金術を知った民族が小アジアからエーゲ海南部の島々に次々と青銅器をもたらし、ついにギリシア本土に到達する。そのためエーゲ海周辺に同じ特徴をもつ文化の存在が確認され、ここに至って初めてエーゲ海圏ともいうべき地域の関連性が強まるのである。つまりエーゲ海圏の青銅器時代の開幕は小アジアに居住していた民族の一部の移動によるものであったと考える理由がある。この系統の文化はエーゲ海の東側のトロイア（Troia）に定着し、その地の利を得て大いに発達した。[1] エーゲ海圏の青銅器時代は約二〇〇〇年間続くが、地域によって若干の差があり、トロイアは三一〇〇年頃すでに都市と呼び得るような大集落となったし、キュクラデス（Kyklades）諸島も極めて早く約三二〇〇年頃に青銅器時代に入っていることが確認される。またクレタ（Kreta）島の Knossos にも三〇〇〇年頃伝えられ、ギリシア本土に青銅がもたらされたのは二九〇〇―二七〇〇年ということになる。いうまでもなく以上の四地域の文明を総称してエーゲ文明というが、互に関連性があるといってもそれぞれが独自性を持つ点も無視できないので、Trojan, Minoan, Cycladic, Helladic の四文明に分類されている。またこのエーゲ海圏の青銅器時代である約二〇〇〇年間を Early, Middle, Late（初期・中期・後期）に分け、さらに必要に応じて各々をⅠ・Ⅱ・Ⅲに区分し、その上細分を要する場合にはA・B・Cと三区分して、遺跡や遺物の年代をこれによって標記することが一般に行われている。ただ Troia だけはこの方法をとっていない。[2]

二三〇〇年頃カフカス（Caucasus）方面から新しい民族が南下し、小アジアに国家を建設した。この民族はIndo-

Europeans の Anatolian に属する Luwi 族と Hittite 族とであった。Luwi 族よりやゝ遅れた Hittite 族は Luwi 族を圧迫しながら小アジア中央部を征服して後の Hittite 王国の基盤を作っているが、Luwi 族は小アジア西南部に国家を建てそこからエーゲ海の島々やギリシア本土にも盛んに植民している。またこの点から考えて Luwi 族は小アジア西岸沿いに南下しエーゲ海南部の島々に進出したものであろう。この Luwi 族の移動の後一〇〇乃至二〇〇年経過して別系の Indo-Europeans がバルカン半島を南下し、Luwi 族の植民者と接触をもつようになった。この民族こそギリシア人にほかならない。この両民族の出会いの経緯は明らかではないが、結果的にはギリシア人がこの地の支配者となったものの地名などには Luwi 語系の特徴を多く残している。[3] この二二〇〇乃至二一〇〇年のギリシア人の侵入を‘Coming of the Greeks’（ギリシア人の到来）と呼んでおり、それ以降が Early Helladic の III 期となる。考古学的に見ても二二〇〇年頃に文化の系統が変化しているのである。一九〇〇年頃から新しい様式の土器（Minyas 土器）が現れ始める。これはギリシア人がギリシアの地で初めて製作した土器であり、侵入後ようやく落ち着き始めたことを意味する。その一九〇〇年頃から Middle Helladic に移行する。この時期にはクレタ島がエーゲ海圏の中心的存在となるが、トロイアでは一九〇〇年頃新しい民族が侵入して第六市を建てている。このトロイアへの侵入民の系統は明らかでないが、土木技術の面で優れており、堅固な城壁を築造している。クレタでは二〇〇〇年から一四〇〇年までを特に宮殿時代と称するが、この時期には Knossos を始めいくつかの都市[4]には宮殿が設けられ、ここに居住する権力者（王）が国内の政治、経済、宗教を牛耳っていた。その交易範囲は広くエーゲ海の島々のほかギリシア本土、小アジアはいうに及ばず、西はシチリア、南はエジプト、東はシリアを経て遠くメソポタミアにまで達しており、東地中海の全域が正にクレタ人の海であった。そし

てキュクラデス諸島は地理的にクレタに近かったこともあって、次第に文化的にもその影響下に置かれるようになり、独自性も次第に希薄になって行く。一方ギリシア本土の諸集落は自らこのクレタの交易圏に組みこまれ、これを利用して自らの発展をもたらした。芸術面においてはクレタの影響を受けているが、明確なプランに基づく町づくりなどギリシア人独自の性格が示されたものも少なくない。クレタで特筆すべきことはこの時代に文字が発明されたことである。これはおそらくエジプトの影響であろうが、初め象形文字であったものが一七〇〇年頃より簡略化された線文字（linear script）が作られた。

ギリシア本土の中でもクレタ中心の交易圏を利用して特に発展したのはミュケナイ（Mykenai）であった。このミュケナイの最盛期が Late Helladic にほかならず、この間にミュケナイがクレタを圧倒して取って代わるが、そのきっかけになったのが一四五〇年頃のギリシア人による Knossos 占拠である。[5] ギリシア人はこのクレタの中心都市を支配したが、ここでクレタの文字を知りその線文字に倣ってギリシア語を書き記すための文字を作った。このギリシア語を書き記す文字（linear B）はギリシア本土にも伝えられ、ミュケナイ、ピュロス（Pylos）、アテナイなどでも使用されていたことが明らかにされている。クレタは Knossos がギリシア人に占拠された後に一四〇〇年頃大地震によって大被害を受けたが、その後はほとんど復興が見られずギリシア人がどうなったかも明らかでない。一三世紀になると西の方から別系統の民族の侵入を受けた形跡がある。ところがその一三世紀頃から東地中海全域に拡大していたミュケナイの影響力が東方から退き始め、エーゲ海方面に何かの危険が迫ってきたことを感じさせる。結局この地域はその後大きな変動を受けることになるが、それはドリス人の侵入と関わりがあるので次章に譲る。

二

ミュケナイのエーゲ海圏における勢力は一四世紀を頂点として次第に衰えていったが、一三世紀になるとギリシア諸国は何等かの危険を察知したかのようにその防備体制の見直しを行っている。[6] このような脅威を与えたものは何者であったのであろうか。それが極めて大きな問題なのである。そもそも海上に大いに発展していたに違いないミュケナイ、ピュロス、アテナイなどはその当時如何なる国家であったかを明らかにしておかなければならない。この点についてピュロスで発見された線文字B（linear B）のタブレットが手がかりとなるし、またホメロス（Homeros）の英雄叙事詩、特に“Ilias”の記事が参考となり、さらに五世紀の歴史家 Thukydides の記述が有用である。

当時のアテナイ王国やミュケナイ王国といった諸王国がピュロスと全く同じ体制であったとは断言できないが、類似の体制を採っていたことも十分考えられる。もっともピュロスの体制といっても線文字Bで知られるのは移動民族の侵入する直前の状況の一断片ともいうべきものである。このピュロスはペロポネソス（Peloponnesos）半島の西南部の海岸近くにある都市[7]であるが、異民族に攻撃されて焼け落ちた。しかしその火災によって多く保存されていたタブレットが焼き固められたため、今から五〇年余り前（A. D. 1939）に発掘されるまで残り、線文字B解読の手がかりともなった。このいわゆるピュロス文書は王室財産や徴税の記録に関するもので文学や歴史を内容としたものは存在しない。ただこの種の記録類が数多く残っていたということはピュロス王国の財政が相当に複雑な手続きに基づいて行われていたことを推察させる。線文字BはA. D. 1953 に解読され、それが多くの

研究者の認めるところとなった。解読が進むにしたがってピュロス王国の社会制度や行政組織が次第に明らかにされてきているが、様々な面についてもいろいろの推論は行われているもののまだ確言できない点も多い。タブレットによるとピュロス王国の支配階級としては wa-na-ka とこれを補佐する役人 ra-wa-ke-ta、軍事面を担当すると思われる e-qe-ta などが知られる。このうち wa-na-ka は明らかに「王」を示している。王宮には極めて専門化した職人奴隷が多数あったこと、この国の主要産業が牧畜と農業であったことはこの文書で知られる。また土地制度についても王有地（te-me-no）、私有地（ki-ti-me-na）、村落の共有地（ke-ke-me-na）の区別が設けられている。王国領内にはいくつかの従属都市があって、そこの支配者は pa-si-re-e と呼ばれその下に ko-re-te-re というものがいたが、これは国家における wa-na-ka と ra-wa-ke-ta との関係に当たる。またこれらの都市には pa-si-re-e の主催する ke-ro-si-ja（長老会）があったことも確認されている。王が直接支配する重要な村落には王によって任命された ko-re-te とその補佐役の po-ro-ko-re-te が配置されていた。⑧これを見ると従属都市に首長の主催する長老会があるということであるが、このことはこれらの都市が半独立的な形であったことを思わしめる。

ピュロス文書は文字通りミュケナイ時代の末期に書かれた記録であり、それだけに貴重なものであるが、この時代は一方ホメロスの英雄叙事詩の時代的背景になっている。ホメロスは八世紀の詩人であるが、その叙事詩は口伝で文字のない時代の伝統を踏まえたものである。いうまでもなくホメロスの叙事詩は文学作品であるのである程度の虚構が含まれていることを念頭に置かなければならないが、しかし全てを虚構として片付けてしまうわけにも行かない。作品の中でも“Ilias”はミュケナイを中心とするギリシア軍が大挙して小アジア西岸のトロイ

アを攻撃したいわゆる「トロイア戦争」の最終段階を中心に語ったものであるが、この中で英雄（heros）として登場してくる人物の何人かは広い支配地を持っており、その点からこれは実は当時の王の姿であろうと推察されている。そう考えた上でこの叙事詩を読むとミュケナイ時代の王国の姿がある程度知られる。“Ilias”第二巻の後半約三〇〇行は一般に「軍船の表」（katalogos neōn）と呼ばれ、ギリシア勢とトロイア方との総勢が列挙されている。そして英雄の名とその支配領域及び軍船の数が Boiotia, Orchomenos, Phokis, Lokris, Euboia, Athenai, Salamis, Argos, Mykemai, Lakedaimon, Pylos, ……といった順番で登場するのである。ミュケナイを例にとれば「Mykenai, Korinthos, Kleonai, Orneiai, Araithyre, Sikyon, Hyperesie, Gonoessa, Pellene, Aigion, Aigialos, Helike の住民からなる軍隊が乗船する軍船は一〇〇隻でそれを統率するのが Agamemnon」（Il. II° 596-576 の要約）となっている。各王国について同種の記事が続いているが、ここに英雄というのを王に置き換え、諸地域を諸都市と読み換えてみるとピュロス文書に見える王と従属都市との関係に類似してくる。ピュロスの場合従属都市といっても実際は長老会などを持つかなり独立性の強いものであったことが考えられるが、“Ilias”に出てくる地域といわれる都市も同じような従属都市で平常は半独立の状態で戦時だけ王の指揮下に置かれたものではなかろうか。

これらとは対比するとかなり時間的な開きがあるが、五世紀後半の歴史家 Thukydides に至って、初めてミュケナイ時代のアテナイについての記述がある。彼は二巻一五章で「Keprops 及び初期の王達の時代から Theseus の時代までアッティカはそれぞれ prytaneion と archon とを頂くいくつかのポリスに分かれており、恐るべき事態が生じない限りは basileus の下に集まって評議することはなく、各ポリス自身が統治し協議していた。そし

て当時はEleusisの人たちがEumolposに率いられてErechtheusと戦ったようにbasileusに反抗する者もあった。[9]」と述べている。

以上の諸史料は成立した時期は異なるが、その内容から見てもミュケナイ時代末期のピュロス、ミュケナイ、アテナイ、ラケダイモンなどの諸国の体制の間には共通点が見られることに気付く。すなわち当時の国家が(1)一つの中心的集落（都市）のほかに大小の集落をいくつか含む領土国家であったこと、(2)中心的都市には王が存在して形式的には全国を代表していたこと、(3)国内の有力な集落（都市）は独自の支配者を有し、平常は半独立の状態にあったこと、(4)したがって王の実質的な全国支配は実現されていなかったこと、(5)ただ危急の際には半独立の都市の支配者も王の指揮の下に置かれ、王が軍隊の頂点に立つこと、以上の諸点が共通項である。またミュケナイやティリュンス（Tiryns）の例からも明らかなように王の居城は堅固な城壁で囲まれており、場合によっては都市全体がその城壁内に存在した。したがって当時の国家にとって戦争の際に最も重要なのはこの城を守ることであったのである。[10]

先に言及した一三世紀中頃に行われた防備体制の見直しとは実は城壁の補強であり、ミュケナイ、ティリュンス、アテナイでそれが明確に認められる。その上これらの都城では籠城した際の水の補給が確保できるように地下抗を掘って地下水に達するようにしている。[11]さらにイストモス（Isthmos）地峡に大きな防壁が築かれている。このことはその危険が陸上から迫ると予測されていたことを意味し、たとえアテナイなどが攻略されてもイストモスで侵入者を抑えればペロポネソス半島の諸国の安全は確保できるという見込みがあったのである。ところが実際は一三世紀の末期にティリュンスの城は破壊され、ピュロスも火災で焼け落ち、ミュケナイも攻撃されて大

被害を受けたが、辛うじて完全な破壊は免れたという結果に終っている。しかしながらこの打撃によってミュケナイ時代は終わり、一時はエーゲ海を支配したミュケナイ文明もこの侵入者によって殆ど崩壊してしまったのである。

三

それではこのミュケナイ文明を崩解させてしまった侵入者とは如何なる民族であるのかそれが問題になるのである。以前に触れたようにIndo-Europeansに属するギリシア人は確かに二二〇〇乃至二一〇〇年頃バルカン半島を南下したが、全てのギリシア人が行を共にしたわけではない。ギリシア人の一派は比較的早くギリシア北西部に定着したが、他の一派はさらに南下を続けてギリシア南部にまで達している。この南下した一派がLuwi族と接触したものと思われ、彼らがHelladic文明を受け継いでミュケナイ時代[12]という最盛期を現出させた。しかしこのような経緯は北西部に定着した一派にとっては全く与り知らぬことであった。この北西部に止どまったものの言語が北西ギリシア方言とドリス方言とに二分される。彼らはその地に定着して以後約一〇〇〇年間移動する気配を見せなかったが、一二〇〇年頃から南方に移動し始めた。しかしながら彼らは先にギリシア南部まで入り言わばその主人公の立場にある一派とは一〇〇〇年近くに亘って異なった環境にあったため風俗習慣のみならず言語の面でも異なった方言を持つようになっていたのである。ギリシア語は東ギリシア方言と西ギリシア方言とに大きく二分されるが、東ギリシア方言[13]は早く南下した一派の言語であり、西ギリシア方言が北西部に定着した一派の言語であった。

ところでこの北西部に止どまっていたギリシア人の一派が一二〇〇年頃大挙して南部に侵入したのでミュケナイ文明は彼らによって破壊されたとするのが長い間通説となっていたのである。それでは前章に触れた一三世紀に陸上から迫ってきた危険というのはドリス人を主体とする西ギリシア方言を語る人々であったのであろうか。しかしこの考え方によると解決できない問題が残るから今日ではドリス人破壊説に疑問が持たれるようになった。とすれば別のところにミュケナイ文明の滅亡の原因を求めなければならない。

先に述べた如く、ミュケナイが発展してクレタを圧倒して行くのは凡そ一五〇〇年頃のことである。ミュケナイを中心とするギリシア軍がクレタの Knossos を攻略したのは一四五〇年頃あるいはそれより若干早いかもしれない。とにかくエーゲ海の支配権はミュケナイの手に移って行くが、その頃エーゲ海圏には外からの脅威は特に感じられてはいないようであった。ミュケナイはエーゲ海を越えて東地中海方面にも進出していたからである。しかし実際はこの頃すでにヨーロッパ中部では、大きな民族移動が始まっていたのである。この民族移動の元を質せば二〇〇〇年頃ハンガリアの地（Carpatho-Danubian region）に起こった小規模な民族移動であった。[14] ところがそれが周辺の民族に次第に波及して、最終的には東はメソポタミア、西はイタリア、南はエジプト、北は黒海に至る範囲に何らかの影響を及ぼしたのである。この民族移動の波が地中海、エーゲ海方面に及んでくるのは一三〇〇年以後であるが、それを逸早く察知したのがエジプトとヒッタイトであった。この両国はシリア地方の領有をめぐって一五世紀頃からしばしば争っていたが、エジプト側の記録によると、一二八四年にエジプト国王 Ramesses II とヒッタイト国王 Khattushilish III とは相互に対等の資格で協定を結びシリアを分割領有することで両者は合意した。[15] このように一〇〇年以上にも亘った紛争が一種の妥協によって解決されたのは、両国ともそ

れぞれにこれまでとは異なった方面からの危険を察知したためで、この新事態に対処する必要があったからにほかならない。その危険はアッシリア勢力の西進とも考えられるが、それよりもむしろ西方海上からの異民族の攻勢であろう。すなわちこの地方にまで民族移動が波及しそうになってきたのである。それはまた前章に若干触れたミュケナイ、ティリュンス、アテナイなどが堅固な防備体制を敷いたのとほぼ同時期である。それでは如何なる民族が東地中海方面に影響を与えたのであろうか。ハンガリア方面の民族移動の波紋は次第に広がり二〇〇〇年紀の後半には今日のユーゴスラヴィア方面に住んでいたイリュリア(Illyria)人の移動を促した。そのためイリュリア人の一部はアドリア海を渡ってイタリアに入り、おそらくシチリア、サルディニアの住民の一部を合流させながら主に海上を東南方向に進み、イリュリア人のなかでもアドリア海を渡らなかった人々は陸上を東南に移動を開始した。東地中海周辺で記録の上に彼らの進入が現れた最初はエジプトである。すなわちエジプト王 Merneptah 治世の第五年(一二三〇年代?)に当時エジプトの勢力下にあった西隣のリビュア(Libya)で反乱が生じたが、その時反乱者側は海を越えてやって来た多くの同盟軍に支援されていたという。そしてその同盟軍を構成していたとみられる民族は Ekwesh, Teresh, Lukka, Shardana, Shekelesh[16] だったという。しかしこの際エジプトは Libya の反乱を抑えるのに成功している。ついで同じく西方からの移動民族と思われる軍団が一一八七年頃パレスティナ方面に集結して海陸両面からエジプトに侵入した。これは Ramesses III の治世のことであるが、この際にもエジプト王は彼らを撃退し得ている。この侵入を企てた民族は Peleset, Tjeker, Shekelesh, Denien, Weshesh[17] であったという。一方小アジア中央部のヒッタイトは一三世紀の後半から急速に衰え、一二〇〇年頃になるともはや統一王国は存在せず、僅かにシリア地方にヒッタイト人が作ったらしい小さな王国がいくつか見ら

れるに過ぎない状態になっている。[18] このヒッタイトの急速な瓦解もやはり移動民族からの攻撃によるものと思われる。また小アジア西岸のトロイア第七市aが一二五〇―一二〇〇年の間に何者かに攻撃され戦火に焼かれて滅亡したことは考古学的に証明されている。[19] 以上のエジプト、小アジアのほかクレタ島もその影響を被っていたものと推察される。すなわちLibyaを援助しつつエジプトに侵入しようとした時、彼らの諸派がクレタ島で合流した形跡がある。このように東地中海をとり巻く地域が大なり小なり移動民族の侵入をうけているのであるから、いわばその通路に当たるギリシアだけが無傷であった筈はない。殊にギリシアはイリュリアに近接しているからかなり早くその影響を受ける可能性がある。先に触れたようにギリシアもある危険を察知して防備態勢を整えたが、それはこのイリュリア人の動静に対してであったのである。しかし一三世紀の後半にペロポネソス半島の主要な王城が殆ど破壊されて王国は全て滅亡し解体した。さらに中部ギリシアでも各地で集落が破壊されたり焼かれたりしている。[20] これは時期的に考えてトロイアやヒッタイトの破壊された時期とほぼ一致しており、移動民族の破壊をともなった通過によるものと考えられる。この大きな民族移動の影響を受けてミュケナイ文明は没落したと考える方がドリス人の侵入によって没落したと見るよりも信憑性が高いようである。もちろんこの移動民族の破壊活動を伴う行動とドリス人の南下と無関係とはいえないが、かりに諸王城の破壊をドリス人に帰すると別のところで説明不可能なことが生じてくる。

ところでエジプトでは北側の海（地中海）を渡ってくる侵入者を‘Northerners coming from all land’と称し、後には「海の民」（Peoples of the sea または Sea Peoples）と総称したが、Merneptah 王の治世の侵入者（Libya 側の同盟軍）の中に Ekwesh（乃至は Akwesh）というのがあり、これが Achaioi を指しているのではな

いかといわれている。ホメロスの詩に出てくるトロイア戦争時のギリシア軍の総称としてAchaioiという言葉が使われているが、もしEkweshがAchaioiであるという推定が正しいとすれば[21]移動民族の中にギリシア人(Achaioi)の一部が含まれていることになり、イリュリア地方からの移動民族の一派がギリシアの地を破壊しつつ通過した時に彼らと行を共にしたギリシア人があったことになる。一般に移動して行く民族にはその通過地の民族の若干の集団が加わることが多いのでこれはあり得ないことではない。さらにまたRamesses Ⅲ時代の侵入民の中にDenyenと称する者があるが、これもDanaoiに結びつけられる。このDanaoiもホメロスなどに見えるギリシア人の総称であり、真実ならばこの集団にもギリシア人が加わっていたことになる。

他方ミュケナイ側は移動民族の侵入を受けたことを暗示する文献は何も残していないが、以上の考古学や文献学上の成果は移動民族がギリシアの各地を破壊しながら通過していったことを証明しているといっても過言ではないであろう。

四

それではドリス人とはいったい如何なるもので何時ギリシア南部に移動してきたのであろうか。先にも触れた通りドリス人はミュケナイ文明を築いた東ギリシア方言の人々と同じギリシア民族ではあるが、長らくギリシア北西部に止まって牧畜生活を営んでいた。しかしドリス人と呼ばれるもの自体がかなり複雑な要素を含む存在なのである。彼らは約一〇〇〇年間ギリシア北西部に止どまった後比較的急速に南方に移動し主にペロポネソス半島に定住したが、さらに海上にも進出してクレタ島やロドス(Rhodos)島に植民し、小アジア南西部に移住した

者もあった。そのドリス人の建設したポリスとして明らかなもののうち代表的なポリスはギリシア本土においてSikyon, Argos, Epidauros, Korinthos, Megara, Spartaがあり、クレタ島のGortyn、小アジアのKnidosがあったが、さらにKorinthosの植民市Syrakusai、またMegaraの植民市であるByzantionなどもドリス人のポリスといえる。これらドリス人の建設したポリスでは常にドリス人の三部族の全て、またはその一乃至二部族を市民団の単位として持っており、場所によっては部族毎に分かれて住んでいたといわれている。[22] その三部族の名称はHylleis, Dymanes, Pamphyloiである。

ギリシアの諸伝承を整理して後世に伝えたApollodoros[23]によると、この三部族のうちHylleisは有名な英雄ヘラクレス（Herakles）の子であるHyllosの系統で、他の二部族は伝説上ドリス人の祖に当たるDorosの二人の孫DymasとPamphylosの系統でこの二部族が純粋なドリス人とされている。ところで伝説でいうヘヘラクレイダイ（Herakleidai）の帰還〉は一般にドリス人の侵入のことであると解されている。ヘラクレイダイとは「ヘラクレスの子孫」の謂であり、ギリシアの名家やヘレニズム時代の王家でさえも大部分がヘラクレスを祖とする系図を持っていたから、いずれもヘラクレイダイを自称し得るわけである。しかしより厳密にはヘラクレイダイはヘラクレスと妻デイアネイラ（Deianeira）との間に産まれたとされる子ヒュロス及びその直系を指す。ヘラクレスはミュケナイ時代に活躍した英雄と信じられている人物であり、伝承上は大神ゼウス（Zeus）とアルクメネ（Alkmene）との間に産まれた子であって、ゼウスは彼をアルゴスの王とするつもりであったが、神々の間の反目のために実現せず、その支配権は別系統のエウリュステウス（Eurystheus）が継承することとなり、ヘラクレスは彼に仕える身となった（Apollod. II. 4. 5）。ところでヘラクレスの死後が問題である。

伝説上ドリス人の三部族の起源の説明によると、ドロスの子アイギミオス（Aigimios）は自身の子であるデュマスとパンピュロスのほかにヘラクレスの子ヒュロスを養子として、この三人に領土を分かち与えたといい、その三人が各部族の名祖となったという。したがってドリス人全体がヘラクレイダイといわれる理由はないのであり、合理的に説明すればそれは Hylleis だけに限られなければならないことになる。最近の研究によると Hylleis はイリュリア系、Dymanes は本来的なドリス人、Pamphyloi はドリス系と他の系統乃至はドリス系の中の諸派の集合体を意味しており、[24] 一口にドリス人といっても実に雑多な要素が含まれているのである。そのことはドリス人がその本来の西北ギリシア方面で他民族の移動等で様々な影響を受けたことを示している。また Bengtson は一五〇〇年以後のイリュリア人の移動に伴なって、イタリア人がイタリア半島に入り、トラキア（Thrakia）人がエーゲ海を渡って小アジアへ至り、ギリシア北部に居住していたドリス人が南に押される結果となった、といっている。[25] これら影響を与えられた民族にはイリュリア系の者が若干含まれていても不思議ではない。ことにドリス人の場合 Hylleis がイリュリア系とされているが、ヒュロスについてはアイギミオスの養子になったといい、また別伝ではヒュロスはパイアケス（Phaiakes）人を率いてイリュリアに移住したともいっており、[26] いずれにしてもこの系統が本来的なドリス人ではないことを暗示している点に注目する必要がある。しかしまた別の立場から考えれば Hylleis を通じてドリス人とイリュリア系との関係が生じることにもなり、この両者を明確に区別し難い点があるのも事実である。

Apollodoros（II. 8. 1-3）に伝えられるヘラクレイダイの物語を要約すると以下の通りである。

ヘラクレスが死んだ後彼の子供たちはエウリュステウスに追われてペロポネソスを去ったが、その後ヒュロスをはじめとする彼の子供達はアテナイで庇護され、エウリュステウスがアテナイを攻めた時ヒュロスがエウリュステウスを討ち取り、ペロポネソスに帰って全ての都市を攻略した。しかし彼らのペロポネソスへの帰還が神意に反していることが明らかになったため、一旦 Marathon に退きあらためて三年後にペロポネソスを攻めたが成功せず、四代目の Temenos に至って苦労の末ようやくペロポネソスを征服した。

このような説明になっており、ヒュロスがドリス人の養子になったという伝承とは一致しないし、他の二部族がこの帰還のために果たした役割にも何も触れていない。“Argos and the Argolid”の著者 Tomlinson はヘラクレイダイ伝説には様々な異説があり、地域によっては異なった伝説が残っているにも関わらず、それを無理に組織立てて語ろうとするからこじつけや作り話が多くなったといっている。[27] 上述の Apollodoros の伝えるものもヘラクレイダイに関する数多くの伝承を勘案したものと思われるが、そのために多少の混乱が随所に見られる。そこで Apollodoros 以前の文献からヘラクレイダイについての記述を求めると断片的ながら Herodotos や Thukydides にまで溯ることができる。

Herodotos は IX. 26 において Tegea 人の言葉としてヘラクレイダイの帰還について概略次のような記事を残している。

ヘラクレスの子ヒュロスはイストモスからペロポネソスへ帰還するために布陣した時、ペロポネソス側と

話し合って軍隊を動かさずヒュロスとペロポネソス軍中の勇士と一騎討ちをし、ヒュロスが勝てばヘラクレイダイは帰還してペロポネソスを支配すること、またもし彼が負けた場合には以後一〇〇年間はペロポネソスへの帰還を求めないことを約束した上で、Tegea の王 Echemos と一騎討ちをし結局ヒュロスが敗れて死亡した。

これにしたがえば彼らヘラクレイダイの帰還は一〇〇年先に延ばされたことになるが、内容的には後の時代の Apollodoros の帰還が延ばされたという記録と一致している。その他の点では必ずしも一致しないが、ヒュロスがアイギミオスの養子になったという物語と結びつかない点は Herodotos, Apollodoros ともに共通している。これはおろらく養子とする物語とは別系統のものと思われる。敢えて推察することが許されるならば、養子の伝承はドリス人の間で生まれたものではないかと考える。これに対し Thukydides はヘラクレイダイの帰還をトロイア戦争と関連させながらその時期に触れているが、トロイア戦争については次章で若干扱うので、この点に関することも次章に譲る。

五

Thukydides はトロイア戦争とヘラクレイダイの帰還との間の年数について、I. 12 で次のように述べている

トロイア戦争直後のギリシアは遠征した人々の帰国が遅れたために混乱状態にあり、内乱が起こったり種

族の移住が起こったりした。その結果ボイオティア（Boiotia）人がテッサリア（Thessalia）人によって故地を追われて Kadmeia 地方に至り、そこをボイオティアと改名して定住したが、それはトロイア戦争終結後六〇年目の出来事であり、また同戦争終結後八〇年目にドリス人がヘラクレイダイと共にペロポネソスを占領した。

ここで注目しなければならないのは著者がドリス人とヘラクレイダイとを明確に区別していることである。これはまた Hylleis が本来ドリス系ではないことを彼が信じていたことを示している。またヘラクレイダイの帰還がトロイア戦争の八〇年後と明言している点にも注目しなければならない。Thukydides が如何なるクロノロジーを考えていたのか明確には解らないが、五乃至四世紀のギリシア人の常識ではトロイア戦争は一二世紀前半[28]であるから Thukydides もこれを認めているならヘラクレイダイがドリス人を伴なって帰還したのは一一〇〇年頃ということになる。これと関連して考慮しなければならないのはトロイア戦争なるものの実態である。一八七一年（A. D.）から始められた Schliemann による Hissarlik の発掘はその成果が明らかになるにしたがってセンセイションを巻き起こした。これが古代のトロイアの遺跡であることは殆ど疑いのないところである。それまではホメロスの英雄叙事詩に歌われているトロイア戦争は虚構であるというのが常識であり、トロイアの存在自体も疑われていたからである。ところが発掘によって伝承の通り何層にも重なった都市の遺跡が発見されると、戦争も虚構として片付けることは出来なくなってきた。Schliemann はトロイアの第二市（Troia II）がギリシア人によって攻撃されトロイア戦争の舞台となった都市であると考えたが、これは時期的にいささか早過ぎる。いわ

ゆるギリシア人の到来は二二〇〇年より以前に溯らせることは出来ないが、第二市の滅亡は二三〇〇年より引き下げるわけにはいかないからである。Schliemann の後継者としてトロイアの発掘を組織的に行った考古学者 Dörpfeld は Schliemann の説を修正してトロイア第六市（Troia VI 一九〇〇―一三〇〇年）であるとした。これは時期的にギリシア人の常識に近く、非常に繁栄していたことも考古学的に立証されているのでギリシア人の攻撃目標になる可能性は十分あった。しかしその後、自身でトロイアの発掘を行う一方、これまでの成果を分析し、Dörpfeld 以後のトロイア研究の第一人者とされる Blegen はさらにこれを修正した。彼はこれまで第六市の廃墟の上に建てられた第七市（Troia VII）とされてきた層をより精密に分析すると二層からなっていることを発見し、それを第七市a、第七市b（Thoia VII a, Troia VII b）と分類した。さらに Blegen は第六市は一三〇〇年頃地震によって破壊されたもので戦火の結果滅亡したのではないことを証明するとともに、第七市aは疑いなく戦火によって焼け落ちていることを証明して、これを基盤としてトロイア戦争は一二五〇年頃と推定している。[29] ところがギリシア本土のミュケナイ文明が破壊されたのが一三世紀の後半であり、しかも既に触れたようにそれに先立ってギリシア人は西北方からの侵入民族に対する備えに専念している。このような時期にミュケナイを中心とするギリシア諸国が大挙して小アジア沿岸に近い一都市トロイアへ遠征するであろうか。たしかにトロイア第六市はギリシア本土や小アジア沿岸の各地と盛んに貿易を行い富を蓄積していたことはギリシア人にもよく知られていた。しかしトロイア第七市aは第六市よりも規模が小さく、貿易なども活発ではなかったので明らかに以前より衰えていた筈である。このような都市を攻撃することによって得られる利益はあまり期待できないにも関わらず、ギリシア人は何を求めていたのか疑問である。当時の戦争は王宮などに蓄積された財宝を手に入れるのが主

目的であったからである。これらのことを考慮すると第七市aは確かに戦火によって焼け落ちたにしてもこれを攻撃したのがギリシア人であるとい証拠はいまだ発見されていない点に注目しなければならない。またこの戦争の際ホメロスの語る通りトロイアが一〇年以上もギリシア軍の攻撃に耐え得たかどうかも疑問である。

いわゆる「海の民」のなかにギリシア人が含まれていたかどうかということも考慮すべき問題である。もし含まれていたならば移動民族がギリシアを通過するうちに彼らと行動を共にしたギリシア人の一部が移動民族の一派として小アジア方面に進んだ際にトロイアを攻撃し、これを破壊したということは十分あり得ることである。この出来事が美化され誇張されて生れた伝説が所謂トロイア戦争であったという解釈もなり立つ。しかしながら先に述べたEkweshとAchaioiの関係にしても、またDenyenとDanaoiとの関係にしても同定されてはいるがその確証は存在しないし、さらにエジプトへの二回目の移動民族侵入の際（Ramesses III の治世）の一民族Peleset[30]がギリシア系であるとの推定はされているけれども傍証のみであり、いまだ移動民族のなかにギリシア人が含まれていたことは確認されてはいない。またBlegenの研究でトロイア第七市aが戦火で焼け落ちていることはほぼ証明されたが、これを攻撃した民族が何者であるのかは不明のままである。ただトロイア戦争を伝承通りに認めればギリシア人（アカイア人）ということになる。

いずれにしてもトロイア戦争の実体は掴み難い。その時期から考えても移動民族侵攻の危険が差し迫っている時にギリシア人が独自に小アジア遠征を行ったとは信じ難い。それ故それを合理的に説明すべく様々な見解が出されている。例えば伝説のいうような大規模な戦争が現実にあったのではなく、もっとはるかに小規模なものが短期間あったに過ぎず、戦闘もギリシア側が一時的に勝利を収めた程度であったとの推論もある。Thukydidesも

トロイア戦争の規模について、それがホメロスの文学的表現によって事実がかなり誇張されていることを指摘し（I. 10-11）、規模がそれ程大きくはなかったことを暗に示している。“Der Kleine Pauly”で‘Seevölkerwanderung’の項を執筆している青銅器時代ギリシア研究の第一人者Schachermayrは同項の中で（イリュリア方面からの）移動民族はエジプトを侵攻する以前にギリシア本土に侵入し、ここでミュケナイの騎士と船とを雇い入れたに違いないと主張して、トロイア戦争もこれら移動民族の傭兵となったギリシア人によるトロイア第七市aの攻撃であることを示唆している。[31] その上彼は一二二〇年以来彼ら移動民族がエーゲ海圏の支配者であったが、ドリス人の侵入によってその支配は瓦解したと述べている。移動民族がミュケナイの戦士や般隊を支配下に置いたという点は多少問題となるが、彼がトロイア戦争を移動民族の行動の一部と見ていることは間違いない。また一方ギリシア史の泰斗Bengtsonはその著“Griechische Geschichte”でトロイア第七市aの滅亡は一二〇〇年頃にイリュリア地方での移動の影響で北ギリシアのトラキア人が東方（小アジア）に移動した際にひき起こされたと推定しており、[32] この出来事がトロイア戦争の伝説の基礎になったと考えているようである。

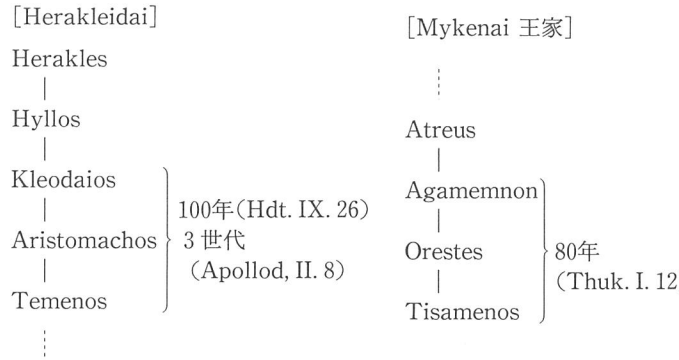
以上のようにトロイア戦争の実態についてはいろいろな推論がなされているのが現状であるが、たとえどんな形をとったにせよトロイア戦争は実際にあったという見方が有力になりつつあるといえよう。

しかしながらこの戦争については未解決の問題が数多くあるのは先述の通りである。古代のギリシア人はトロイア戦争は過去に実際にあった戦争と考えており、Thukydidesもこれを一つの紀年として採用している程である。ところでThukydidesがイリオン（Ilion）の陥落後八〇年目にヘラクレイダイは帰還したといっていることは先に触れた。ギリシアの伝承によるとトロイア戦争においてギリシア軍全体を統帥していたのはミュケナイ王

Agamemnon であるが、ヘラクレイダイ帰還当時は Agamemnon の孫に当る Tisamenos の時代に当っていた。これはトロイア戦争とヘラクレイダイの帰還とがすぐ続いて起きた出来事ではなく、両事件の間には少なくとも二世代以上の開きがあったことを示しており、Thukydides の伝えるところ（八〇年）と大きな矛盾はない。ではこの年代の開きは何を意味するのであろうか。イリュリア方面からの移動民族がギリシアに侵入して諸王宮を破壊したのは一二五〇乃至一二〇〇年と想定されるが、トロイア第七市aが戦火で焼かれたのも同時期である。とすると移動民族のギリシア侵入とトロイア第七市aの滅亡という二つの出来事の間には時間的に見て大きな開きはなく、むしろすぐ続いて生じた事件と思われる。すなわちイリュリア方面からの移動民族がまずギリシア各地を破壊しながらエーゲ海を渡りトロイアを攻撃したと推定できる。Blegen はピュロスの破壊よりもトロイア第七市a破壊の方が早かったと推論しているが、移動民族の侵入は一回とは限らず数派に分かれる可能性が多いし、またその経路も一様とはいえないから、かりにピュロスの方が多少あとであったということもあり得るであろう。なお Schachermayr はピュロスは移動民族のうち海路を取ったものによって破壊されたといっているが[33]、ピュロスの位置から考えればあり得ないことではないと思われる。その真偽はいずれにせよ、ギリシア諸王宮の破壊とトロイア第七市aの破壊とがほぼ同時期であるならば、本土への移動民族の侵入といわゆるヘラクレイダイの帰還（ドリス人の侵入）との間には二世代の差があることになり、ドリス人が侵入した時には既にミュケナイ文明は粗方破壊されてしまっていたことになる。そしてその際先に見た Herodotos IX. 26 あるいは Apollodoros II. 8. 1-3 の伝承も注目すべき内容をもっていたことに気付くのである。

まず Apollodoros の物語ではヒュロスはアテナイに攻めてきたエウリュステウスを討ち取った後ペロポネソ

スに入って全ての都市を占領した、という記事であるが、これを行ったのは既に見た通り実際はイリュリア方面からの移動民族であった。次に彼らがここを退去したというのは移動民族がさらにここからおそらく東方へ移動していったことの伝説的表現にほかならない。またヒュロスの敗北はイストモス付近の攻防で移動民族のなかには侵入を果し得なかったものもあることを物語っているということができるであろう。そして最後の三世代後（Herodotos の場合は一〇〇年後）にようやくレラクレイダイが帰還に成功したというのがほかならぬドリス人の侵入を意味しているのである。つまり伝説はドリス人を含めてギリシアの地に北西から進入してくる集団をすべてをヘラクレスの子孫と理解しているのである。このように見てくると、イリュリア系の移動民族が最初にギリシアに侵入しペロポネソス各地の都市を破壊してからドリス人の侵入までを約一〇〇年乃至三世代を経たことになり、これは Agamemnon-Tisamenos 系の伝説とほぼ一致し、Thukydides の記述する年代（八〇年）とも近い。ヘラクレイダイの系譜とミュケナイ（またはアルゴス）王家の系図とを併記するのは困難であるが、敢えて作図すれば上の図のようになると思われる。なお Apollodoros によるとヘラクレイダイの帰還を達成させた Temenos の軍によって Tisamenos は殺されたという。



ことにイリュリア系民族がギリシアを経由してここからトロイアへ行ったならペロポネソスが攻撃されたのはドリス人の侵入より少なくとも八〇年以上以前であったことになる。これらの伝説を勘案するとThukydidesのいう八〇年を否定しなければならない材料は何もなく、したがってペロポネソスの諸王宮やトロイア第七市aが移動民族によって破壊されたのが一二五〇乃至一二〇〇年とすればドリス人の侵入は略一一七〇乃至一一二〇年ということになる。HammondもLate Helladic III B期の移動民族の侵入では大被害を受けながらも残されたミュケナイの城塞が焼け落ちるのはLate Helladic III C期の後半と見なしている。[34]

これら文明破壊者たる移動民族がギリシアに止どまらなかったということは近年多く認められるようになったと考えられる。Tomlinsonは「この時の侵入者は破壊と略奪に終始してこの地に定住しなかった」[35]と述べ、さらに当時繁栄していたレヴァント（Levant）方面[36]へ進んで行った可能性のあることを示唆し、この時期に南部ギリシアやアルゴリス地方には定住人口の増加はなかったと断じている。また“A History of Sparta”を書いたForrestも「一二〇〇年頃の侵入者によってミュケナイ文明は破壊されたが、彼らはそこに止どまらずさらに移動して行った」[37]と述べている。このように研究者によってニュアンスの相違はあるが、移動民族が文明を破壊したこと、彼らはギリシアに止どまらずにさらに先へ進行したことの二点については一致している。したがっておそらくイリュリア人を主体とする侵入民族は一旦ペロポネソスに入り諸都市を破壊したが、ここに定住した痕跡は全くなく、文字通りの通過者だったのである。FinleyやTomlinsonはこれによってペロポネソスの人口は激減したというが[38]、それは先住のギリシア人が避難民となって破壊を免れた地方に逃れたからである。しかし反面「海の民」などの移動民族の集団の中にギリシア人も加わったのであれば、これまた人口減少の一因だったであろう。

ところで Tomlinson はペロポネソスへの移動民族の侵入は前後三回あったと主張している。[39] 上述のものが第一回目であるが、第二回目は一二世紀に入ってからで、前回の侵入の際には攻撃を免れた集落が破壊されたという。また Finley は前回の破壊の後にも（Late Helledic III C）ミュケナイ、ティリュンス、イオルコスなどの王宮は修復されなかったけれども、これらの都市に居住民は存在していたことを指摘している。[40] そしてこれらが完全に破壊されるのがドリス人の侵入であり、彼によるとペロポネソスへの民族侵入はいわゆる移動民族とドリス人との二回であったという点で Tomlinson と異なる。Hammond も最初の侵入民族の際にはミュケナイの城塞だけは焼け残ったが、これが焼け落ちるのは一一四〇乃至一一二〇年でそれをドリス人の侵入の結果と見ている。

Tomlinson の所説で最も問題となるのは三回あったという侵入のうち第一回目と第二回目とにはドリス人が全く含まれておらず、第三回目こそがドリス人であったとする点である。彼は第三回目以外の移動侵入民族が何物であったのか確言を避けているが、Epeiros 地方の北に当たるイリュリア方面からの侵入民族と見ていることは明らかである。しかしドリス人とほかの移動民族とがそれ程はっきり区別できるであろうか。民族が移動する場合、移動の途中に他の要素を加える可能性は多分にある。一三世紀後半に始まる移動民族の侵入は二回にせよ三回にせよ常にイリュリア人とその移動の通路に当たる地方に居住していたドリス人とを含んでいた筈である。初回と定住者となった終回との相違はあくまで数的な主体であって、最初の場合はイリュリア系が主体であったのに対し、最後の侵入し定住した場合はドリス人が主体であったと見るべきであると考える。したがって第一回目の移動民族となったイリュリア系民族の中にも多少のドリス人は含まれていたと推定できるが、終回の定住した際の移動でもイリュリア系とドリス人との協働が見られると思われる。この最後の侵入こそが本来の「ヘラク

レイダイの帰還」と呼ばれるべきである。後のスパルタ、アルゴス、メッセネ（Messene）のドリス系王朝はいずれもヘラクレスを祖とする系図を持っていることを考えても、少なくとも侵入時にはヘラクレス―ヒュロス直系と宣伝するHylleisが指導的な役割を果たしたであろう。そのHylleisがイリュリア系であるのだから、この最終の侵入もイリュリア系民族の移動が核であって、ギリシア北西部に止どまっていたドリス人がこれに触発され大挙してそれと行を共にしたと推定せざるを得ない。彼らはミュケナイ文明が粗方破壊された後のペロポネソスに侵入し、ここに定住して支配するに至ったのである。とにかく一二世紀後半のドリス人を主体とする侵入が伝説上のヘラクレスの子孫の帰還であるが、それはヘラクレスがペロポネソス地方で活躍した英雄であったためその子孫が一旦追われたとしても父祖の地に帰るのは当然と見なすからである。そしていわゆる「ドリス人の侵入」（Dorian Invasion）とはこの一二世紀後半期のものを指すのであるから、その時にはミュケナイ文明は殆ど崩壊していたのである。それ故にこそドリス人がそれまで繁栄していたミュケナイ文明を一挙に破壊したという説は成り立たないのである。

六

ギリシア本土ではイリュリア系諸民族の侵入、ドリス人の侵入などでミュケナイ文化圏の先住ギリシア人はどうなったであろうか。先にも触れた通りイリュリア系諸民族の侵入に際して彼ら先住ギリシア人の一部分は移動民族と行動を共にしたかと思われるが、またかなりの部分は他所へ避難したようである。Thukydidesは「アテナイにはギリシア各地から戦争や内乱のために避難してくるものが多かった」（I.2）と述べているが、またピュロ

スが移動民族によって攻略された時に王族がアテナイに避難したという伝承もある。[41] 実際アテナイだけは移動民族やドリス人の攻撃に堪え攻略を許さなかったので、破壊された諸都市の住民がアテナイに多く殺到することは十分あり得ることであり、Thukydidesもアテナイからイオニア（Ionia）地方への植民の動機をそのための人口の異常な増加に求めている。

しかしさらに注目すべきは言語学上の研究成果から明らかにされたことである。八世紀までにギリシアの方言地図は確定されるが、その一方言で東ギリシア方言に分類されるArkadia-Kypros方言といわれるものがある。Arkadia はペロポネソス半島中央部にあり、周辺の各地域とは山脈によって遮られている土地である。一方Kypros は東地中海東部にある島でシリア地方への交通上、貿易上の重要拠点であり、ミュケナイの最盛期にギリシアの貿易業者が活躍していた場の最東端に当たっている。ところがArkadia とKypros とは直線距離にしても九〇〇乃至一〇〇〇キロメートル隔てられているにも関わらずその両地方の方言の間には密接な連関があって、その根源は共通していると推定される。したがってこれがArkadia-Kypros 方言として一括されているのである。[42] しかもその方言が移動民族侵入以前のミュケナイ文化圏におけるギリシア人の言語に極めて近い関係にあるので[43]この言語は元来ペロポネソス半島からKypros に至る広い範囲に弘布していたギリシア語の痕跡を止どめていると考えられる。それが後の時代にはArkadia とKypros にだけ残ったのは次のような次第であろうと推定される。すなわち移動民族やドリス人がペロポネソスに侵入した際に先住ギリシア人の一部は山に囲まれたArkadia に逃れ、ほかの一部はミュケナイ東方貿易の拠点であったKypros 島に移住した。したがってかつてはミュケナイの勢力圏全体に通用していた言語を語る種族がこの互いに極めて遠い二つの地域に集中することになっ

た。そしてこの両地域を結ぶクレタ、ロドスなどの島々や小アジア南部には九世紀頃までにドリス人が植民したのでドリス方言が流布し、古い言語は完全に忘れられたものと思われる。しかし Arkadia と Kypros は一方は山で、一方は海で他の地域と隔絶していたので、古い言語の形を比較的多分に残していたのであろう。このような点から考えると移動民族やドリス人の侵入によって人口が減少したのはペロポネソスの周辺部、あるいはミュケナイなど大都市についていい得ることであって、Arkadia では人口の増加も考えられる。しかしその周辺部が後にドリス方言の地域になり、殆ど古い言語の形跡すら残さなかったところを見ると周辺部の人口は相当に減少しており、ドリス人の支配下におかれた先住ギリシア人の数はミュケナイ文化圏の盛時とは比べものにならない程度であったであろう。そのためにドリス人がペロポネソス半島の各地にポリスを建設する以前の段階では人口が少なかったので他の地方の人々の移住を歓迎したという伝承があることからも明らかである。Arkadia の人口増加についてもこれによって同地方がより強固な防備体制をとり得たことを推定させる。というのはヘラクレイダイの帰還に際し、Arkadia 王がその国を危険から救い彼らの侵入を防止したという伝承もあるが[44]、事実ドリス人はペロポネソスに侵入した当時 Arkadia には入っていないことが明らかだからである。

ペロポネソス半島に定住することになったドリス人は彼らの侵入をヘラクレスの子孫の帰国として侵入と支配権を正当化し、約八〇乃至一〇〇年前の侵入者との関連を持たせたのである。この関連をとくに強調したのはやはりこの侵入者が共にイリュリア系とドリス人とから構成されていたからこそであろう。要するにドリス人を主体とした侵入民が入った時には破壊すべきものは殆ど残っていなかったし、激しい抵抗を受けることも比較的少なかったのではないかと思われる。一口でいうならばドリス人の侵入は概して平和裡に行われたのではないかと

さえ推論することができる。それは〈ヘラクレイダイの帰還〉という表現自体にも現れており、そこには攻撃的、侵略的なニュアンスはあまり感じられないからである。またこのドリス人の侵入を伝える伝説には各地の王宮や王城などを攻略したことが全く語られていない。たしかにこの時期には破壊すべき都市も城塞も余り残ってはいなかったかもしれない。しかし彼らが少なくとも破壊活動を伴って来冠したならば伝説に何らかの痕跡を残す筈であるが、それが全く見られない。そのほかにも戦争と結びつく記憶は残っていない。さらにThukydidesはドリス人がヘラクレイダイと共にペロポネソスを占領した後、ギリシアは永続的な平和を回復し間もなく植民活動を開始したといっている（I. 12）。Thukydidesのこの記事はヘラクレイダイの帰還によってむしろ混乱していたペロポネソスに秩序が回復されたことを思わしめるが、それと同時に民族移動の波もようやく収まりその後ギリシアに混乱をもたらすような異民族の侵入はなかったことを示している。

以上のように一二世紀中葉以降のイリュリア人の一部を核とするドリス人の移動がいわゆる“Dorian Invasion”と見るべきであろう。それ以前のイリュリア人を主体とする移動民族の中にあったと思われる若干のドリス人はいつしかイリュリア系の中に統合されたであろうが、定住した最後の侵入の際には逆にドリス人が主体であったのでイリュリア系も時と共にドリス人に統合されていったであろう。しかしそれでありながらもスパルタの王家はHylleisとしてその独自性を保持していたのではあるまいか。ヘラクレイダイとドリスとを区別するThukydidesのような考え方は少なくともドリス人の建設したポリスであるスパルタでは長らく生きていたことは明らかである。[45] それに対してほかのポリスの人々はスパルタをドリス人のポリスと考え両者の区別などは全くしていない。

移動民族やドリス人がペロポネソスに侵入した時にそれを「ヘラクレイダイの帰還」と敢えて称したのはHylleis をその中に含むことによってその正当性が保障されるからであろうが、本来的にヘラクレイダイの帰還といい得るのはやはり一二世紀後半と考えられる最終的な侵入時であろう。しかし伝承上ヘラクレスはゼウスによってアルゴス王に擬されたものの実現せず、したがってミュケナイ乃至ペロポネソスの支配者であったとは考えられてはいない。それ故ヘラクレイダイもペロポネソスを支配する正当性は持っていない筈である。それにもかかわらず、これを強調したのは当時の先住ギリシア人の間に英雄ヘラクレスに対する信仰が深くあったのではないかと思われる。もしそうであればヘラクレスに寄せる先住ギリシア人の敬慕の念を逆用して自らヘラクレスの子孫であるという宣伝をしたとも考えられる。したがってヘラクレイダイの帰還というべきものは上記のように最後の侵入であり、それ以前のイリュリア地方からの移動民族は一三世紀の後半それもおそらく比較的早くペロポネソスやギリシア中部を攻撃していわゆるミュケナイ文明を没落せしめたのである。したがって一三世紀後半と一二世紀後半の危機は全く別個のものであったが、文字通りドリス人を主体とする一二世紀後半の侵入の際にヘラクレイダイを標榜したので一〇〇年前の恐るべき出来事の記憶とが結びつけられ、移動民族の通過をもヘラクレイダイの帰還の試みと理解されて伝説が成立したものと思われる。

ところでこのドリス人の侵入後しばらくの間ギリシアの歴史は不明確になってくる。とくに侵入したドリス人がどのようなプロセスを経て国家を形成するようになったかについても不明の点が多く、これを直接的に語る史料は存在しないし、これを推定させる史料も乏しい。[46] しかし一一〇〇年頃からの二〇〇年前後が実はギリシアにとって大きな変貌を遂げる時期であった。九〇〇年頃からポリスが成立し始めるが、ポリスの成立に関する諸問

題は本稿では触れない。

なおヘラクレスとヘラクレイダイについては先学の多くの業績があるのでそれを踏まえつつ再考したいと思っている。

七

以上“Dorian Invasion”をめぐる若干の問題点を雑然と列挙してきた。ドリス人の侵入が直接的にミュケナイ文明を崩壊させたのではないことはほぼ確定的といってもよいであろう。[47] ここでは、そのドリス人よりも早くギリシアの地を通過した筈であるイリュリア系民族の移動をエジプト、ヒッタイトなど周辺各国に波及した大きな民族移動の一環として捉えなければならないことを指摘しておく。その際ギリシアの伝承との関連性も考慮にいれるべきであろう。

ドリス人の侵入は長い間ミュケナイ文明を没落させたものとしてギリシアの歴史の中において発展という点から考えればマイナスの要因として捉えられてきた。けれどもむしろこの事件を別の観点から見直すことが必要ではなかろうか。その際 Thukydides（I. 12）の「ギリシアに永続的な平和をもたらした」という言葉をも吟味してみる必要があるであろう。

またこの移動民族といわゆるトロイア戦争との関係についても多少考察した。トロイア戦争に関しても、その戦争の規模、時期などをこれまで発表された研究を踏まえて考えてみた。これについてはいまだ結論を得ていないが、見通しとしてはトロイア戦争は移動民族のギリシアから小アジアへの移動の嵐の一環を成すものと考えら

れている。この点についてもより詳細に論じなければならないが、すべて別の機会に譲る。

以上本稿は問題点を指摘して、その見通しを述べるに止どまった。不備な点は多々あることを十分承知の上で一応擱筆したい。

註

① Finley, M. I., Early Greece: The Bronze and Archaic Ages. New and Revised Edition. 1981., p. 9 はトロイアが下ダニューブ、エーゲ、小アジア各地域の結節点であることを指摘する。

② トロイアだけは発見者 Schliemann が行った層序による方法が尊重され、今日に至るまでこれが継承されている。

③ 岸本通夫「印欧語族の移動とヒッタイト王国の抬頭」（『岩波講座世界歴史』I〔一九六九年〕所収、一六一―一九六頁）一六九―一七二頁。大城光正・吉田和彦『印欧アナトリア諸語概説』一九九〇年。一五四頁。

④ Phaistos, Mallia など。

⑤ このことは考古学、言語学の面から証明されているが、物語、伝説の類は一切伝わっていない。

⑥ Stubbings, F. K., The Recession of Mycenaean Civilization. (Camgridge Ancient History. 3rd Ed., 1975., Vol. II Part 2 所収、XXVII pp. 338-358) p. 352.

⑦ 伝説ではトロイア戦争当時の英雄 Nestor の居城。

⑧ 上記の wa-na-ka 以下の線文字Bによる官職名はいずれも Ventris, M. and Chadwick, J., Documents in Mycenaean Greek. 300 Selected Tablets from Knossos, Pylos & Mycenae with Commentary and Vocabulary. 1959. の Appendix I Mycenaean Vocabulary. (pp. 385-413) に含まれている。なお拙稿「テセウスとアテナイ」（『大谷学報』六五―三、〔一九八六年〕所収、二八―三九頁）三〇頁。

⑨ Erechtheus がアッティカの王（basileus）で Eumolpos はその従属都市と見られている Eleusis の首長（archon）である。なお Marmor Parium（パロス大理石碑文）一二―一五によると Erechtheus は一五世紀から一四世紀にかけて

アテナイの王位にあったことになっている。

⑩ 藤縄謙三「ポリスの成立」（『岩波講座世界歴史』Ⅰ〔一九六九年〕所収、四三三―四六〇頁）四五五頁。

⑪ Stubbings, op. cit., p. 352.

⑫ Late Helladic 期をミュケナイ時代と呼ぶことが多い。

⑬ 東ギリシア方言はイオニアーアッティカ方言、アイオリス方言、アルカディアーキュプロス方言に三分される。（高津春繁『ギリシア語文法』一九六〇年、七頁参照）

⑭ Finley, op. cit., p. 58

⑮ Faulkner, O., Egypt : From the Inseption of the Nineteenth Dynasty to the Death of Ramesses III.（C. A. H., 3rd Ed., 1975., Vol. II Part 2 所収、XXIII. pp. 217-251.）pp. 228-29. ; Goetze, A., The Hittites and Syria（1300-1200 B. C.）.（C. A. H., 3rd Ed., 1975., Vol. II Part 2 所収、XXIV. pp. 252-273.）pp. 258-59.

⑯ これら諸民族の表記法は必ずしも一定していないが、ここでは Sandars, N. K., The Sea Peoples. Warriors of the ancient Mediterranean, 1250-1150 B. C. 1978. にしたがう。

⑰ 前註⑯参照。

⑱ 岸本　前掲論文一八〇頁以下、Finley, op. cit., pp. 56-57.

⑲ Blegen, C. W., Troy VII.（C. A. H. 3rd Ed., 1975. Vol. II Part 2. 所収、XXI（c）. pp. 161-164.）彼はアカイア人によるトロイア攻撃の可能性を認めているが、年代を確定することは慎重に避けている。

⑳ Iolkos, Krisa など（Finley, op. cit., p. 58 参照）

㉑ これと関連してヒッタイトの一五〇〇―一二五〇年頃の Boǧazköy 文書に出てくる Ahhiyawa を Achaia 人（Achaioi）の国と同定しようとする見解が E. Forrer 以来根強いが、反論もある。

㉒ ホメロスの“Odysseia”XIX. 177. に「三部族からなるドリス人」とある。

㉓ Apollodoros の“Bibliotheke”では Herakles については II. 4-7. に記され、Herakleidai については II. 8. に記述がある。

㉔ Bengtson, H., Griechische Geschichte von den Anfängen bis in die Römische Kaiserzeit. 5 Aufl., 1977., S. 53.

㉕ Bengtson, op. cit., S. 51.

㉖ 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』、一九六〇年。「ヒュロス」の項（二一二頁）参照。

㉗ Tomlinson, R. A., Argos and the Argolid. From the End of Bronze Age to the Roman Occupation. 1972., p. 61ff.

㉘ トロイア戦争の時期について古伝承では必ずしも一致しておらず一一八四年説、一一五九年説などがあるが、一二世紀前半から大きく離れたものはない。なお三世紀前半に成立した Marmor Parium (24) は戦争終結を一二〇八／七年としている。

㉙ Blegen, op. cit., p. 163.

㉚ Finley, op. cit., pp. 57-58. 参照。Finley は Palestina という地名は Peleset に由来すると述べている。Peleset はエジプトから撃退されてこの地に定住し地名にその民族名を残したという。また Peleset は旧約聖書『サムエル記』に登場するペリシテ人（Pelishtim）の祖先に当るとされるが、それがギリシア系とされるのはその遺跡からミュケナイ風の陶器（Mycenaean III C）が出土するからである。しかし彼らが「海の民」の一派であったことは確実と思われるが、ギリシア系であったか否かはこれだけでは断定できない。

㉛ "Der Kleine Pauly" Lexikon der antike. 5. Bd., 1975. Sp. 65-67.

㉜ Bengtson はトラキア人が小アジアのプリュギア（Phrygia）に移動したが、その地ミュシア（Mysia）にはイリュリア的要素があるという（Bengtson, op. cit., SS. 51-52. 及び同書巻末年表 S. 573. 参照）。

㉝ 註㉛に同じ。

㉞ Hammond, N. G. L., The End of Mycenaean Civilization and the Dark Age. (C. A. H., 3rd Ed., 1975, Vol. II Part 2 所収、XXXVI (b). pp. 678-721) p. 711.

㉟ Tomlinson, op. cit., p. 52.

㊱ Levant には広狭の二義あり、広義には地中海東部からエーゲ海沿岸の諸地域を指し、狭義にはより具体的にシリア、エジプトの海岸を指す。Tomlinson の場合は恐らく広義であろう。

㊲ Forrest, W. G., A History of Sparta. 950-192B. C. 1968., p. 26.

㊳ Tomlinson, op. civ., p. 64.; Finley, op. cit., pp. 61-64.

㊴ Tomlinson, op. cit., p. 53.

㊵ Finley, op. cit., p. 61.

㊶ Herodotos V. 65. によるとアテナイのペイシストラトス（Peisistratos）一族はピュロスの王族の後裔で、ペイシストラトスという名もトロイア戦争当時のピュロスを支配していた王 Nestor の子の名に因んで付けられたという。また Herodotos は同所でそのほかに Kodros や Melanthos なども同じ一族であるといっているが、たしかにアテナイの王統メドンティダイ（Medontidai）の祖とされる Melanthos はピュロス王の子孫と信じられている。

㊷ 高津春繁『ギリシア語文法』（前掲）一二―一五頁。

㊸ 高津『ギリシア語文法』三―五頁。

㊹ Pausanias, VIII. 5. 6. によるとアルカディアの Kypselos 王はドリス人がペロポネソスに侵入した際に彼らの指導者の一人 Kresphontes を自身の娘と結婚させ、これによってドリス人のアルカディア侵入を防止した経緯を述べている。

㊺ Herodotos, V. 72. にスパルタ王クレオメネス（Kleonenes）一世がアテナイで「ドリス人」と呼びかけられた時「自分はドリス人ではなくアカイア人である」と応えたことが見える。

㊻ ドリス人が侵入後直ちにポリスを建設することはあり得ない。アルゴス、ラコニア、メッセニアの三地域をさし当り支配する際にそれぞれの征服者がそれぞれの地域を数箇の部分に分けている。メッセニアの場合は五、ラコニアの場合は六の部分に分けて都市を建設し、地域の中心地を王（basileus）の住いとして王城を置き、他の町にはそれぞれに王（basileus）を送っているとStrabon は Ephoros を引用しつつ述べている（Strab. VIII. 4. 6-7., & VIII. 5. 4）。王城の王も他の町に送られた王も共に basileus と記述されているが、これは同格なのではなく送られた王の方が下位に立つと見てよいであろう。このような体制が事実ならば、ミュケナイ時代の王国のあり方と外見上は近いことになる（原随園「スパルタの古制について」〈『ギリシア史研究余滴』（一九七六年）所収、三〇二―三四三頁〉三一四―三一八頁参照）。ただポリスが建設されるまでその体制が維持されたか否かは不明というほかはない。

ミュケナイ文明の崩壊についてはドリス人の侵入によるという旧説は別としても、移動民族による破壊説のほかに数的には少ないが異なった見解をとる研究者も若干ある。R. Carpenter などはその一人である。彼は以前にも Troia は Hissarlik ではないと主張して学界を驚かせたことがあるが、一九六六年には“Discotinuity in Greek Civilization.”を出版した。これはわずか八〇頁の小冊子で前年の Cambridge の J. H. Gray Lecture の内容であるが、要するにミノア文明は一四〇〇年頃 Thera 島の爆発にもとづく地震によって崩壊し、ミュケナイ文明はドリス人の侵入ではなく異常乾燥を原因とする饑饉によって滅びたという主張をしている。ミノアについて Carpenter は Thera が伝説にいう Atlantis であると主張しているが、それはさておいてミュケナイ世界の崩壊が Late Helladic III B の末の異常乾燥によるとして、気象学上の説明を詳しく行っている。この種の異常乾燥は約一八五〇年を周期として起こる気象変動の産物とし、この時には貿易風が例年より相当北に偏し、西風が恒常的に吹くことになるという。この西風がメッセニア、ラコニア、アルゴリス地方に強く吹いて乾燥度が進んだので住民が多く移動して去り、いわば無人の地となったところにドリス人が侵入したのであると説明する。ミュケナイ文明が崩壊してやや時間をおいてからドリス人が侵入したとする点でドリス人破壊説には反対しているが、反面気象条件の変化によってのみ文明が崩壊したとする所説にはにわかに同意し得ない。地勢と風向きとの結びつけとその結果が果して彼のいう通りに運ぶかどうかは疑問であり、説明がいささか強引すぎるところがあることは否定できない。

他方 J. T. Hooker は“Mycenaean Greece”(1977) 及び“The Ancient Spartans”(1980) において、ドリス人はあとから侵入したのではなくミュケナイ人(Mycenaeans)と共に始めからペロポネソスに居住していたという説を展開している。すなわち historical period の開始と共にペロポネソスに居住しており、ドリス方言を使用してはいたが、これは他のギリシア人との communication を妨げるものではなかったとする（The Ancient Spartans., p. 44)。そしてドリス人はミュケナイ文明の隆盛期にはアカイア人の支配の下に下層階級を形成していたが、彼らが支配者層に反乱を起こしこれによってミュケナイ文明は崩壊したと Hooker は主張するのである。したがって彼は「ヘラクレイダイの帰還」という伝承は外部からの新要素の到来ではなく、抑圧されていた民衆（ドリス人）の反抗運動とその成功を意味すると解している。Hooker は literary account と archaeological record とを安易に一致させるべきではないという立

場をとっているが、この際彼らドリス人による反抗が何故ヘラクレイダイの帰還という伝説に変形されたのかという説明はなされていない。

以上のように Carpenter にしても Hooker にしても新しい見解（新解釈）として注目すべきものではあるが、現段階では説得的とはいえない。なお中井義明「ミケーネ文明の盛衰」（『駿台フォーラム』第十号〔一九九二年〕所収、一―二五頁）一六―二一頁参照。